

# 「山古志 復興新ビジョン」

## 第2回全体会議 議事概要

1.日 時 平成17年3月7日(月)10:00~12:00

2.場 所 白山会館 2F「太平」

### 3.議事概要

(1) 委員長挨拶(省略)

・新潟経済同友会 筆頭代表幹事 江村 隆三

(2) 出席者紹介と配布資料の確認(省略)

(3) 3分科会、円卓会議の開催報告

3分科会と円卓会議における主な意見(事務局より資料 3説明)

(4) 山古志復興新ビジョン中間報告の検討・決定

中間報告<本編、資料編>の説明(事務局より資料 4,5説明)

中間報告の検討(報告内容の決定)

意見交換

### <山古志土砂災害危険エリア図>

(丸井委員)

今後の復興においては、融雪を経た段階で不安定な土砂がどうなるか、新たな地すべりが発生するかどうか大きな問題となる。融雪後に関係機関が中心となり、あらためて安全性の確認のための一斉点検が必要になると考えている。

ただし、現時点で相対的に安全なエリアとそうでないエリアとをある程度評価し、分けておくことは重要なことである。

### <山古志復興新ビジョン 中間報告(案)>

(西澤座長)

いろいろな事業を展開する上で、村民が学習する機会を設けることが大事である。復興リーディング・プロジェクト1において、勉強、研修、実習といった学習機会の提供も一つの事業として位置づけた方がよいのではないか。

(木村アドバイザー)

- ・ビジョンに書かれている項目を誰がやるのか、どこにお願いするのかなど、主語・主体をできるだけ明確に記述した方がよいのではないか。
- ・帰村後も、降雨等により住民が避難する事態が起こりうる。今のビジョンは、帰るにあたっての地区の選別に重きを置いているが、帰った後の避難まで踏み込んで記述してはどうか。

(事務局)

本ビジョンでは復興の方向性を示すことを考えている。提言した後は、各自治体の判断にお任せしたい。

(伊藤総合アドバイザー)

- ・帰村後の二次災害を軽減するための施策や情報の伝達体制の整備を検討する必要がある。防災の第一歩はハザードマップ。それを前提として、地域のありようを考えていくことが重要である。
- ・本編冒頭の「国づくり」という言葉は、国際社会における日本の政治・社会・経済といった大きなとらえ方をされてしまう可能性がある。「国土づくり」や「国土保全」の方がよいのではないか。

(小田オブザーバー)

闘牛は山古志だけに限られた文化ではなく、県の重要文化財であることを書き込んだ方がよい。

(澤田委員)

- ・山古志の人たちのメンタリティを考えると、創造的復興や新たな生業に関するプロジェクトを示しても、なかなか行動に結びつかない可能性が大きい。教育やプロジェクトを動かしていく推進エンジン部分がセットで議論される必要があり、その点をビジョンでも強調すべきである。
- ・プロジェクトの実施には相当な下支えが必要であることから、第2 村民等の外部の人たちと一緒に実現していくことが重要となる。とくに、次代を担う若い人たちに振り向いてもらうには、サポート体制が整っていることを示す必要があるのではないか。

(松本委員)

- ・復興リーディング・プロジェクトはビジョンとしてはよいが、すでに完成しているもののように思える。ここに至るプロセスの段階で、応援部隊を形成するための計画が必要ではないか。
- ・東京や外国の人たちだけでなく、長岡周辺地域や新潟県内の人たちにも応援部隊を結成してもらい、復興をサポートしてもらってはどうか。

(平井座長)

- ・復興リーディング・プロジェクト 1 は、21 世紀の全く新しい住民自治の形となる可能性がある。それを謳ってはどうか。
- ・プロジェクト 2 については、地域間のリンケージが大事であるため、外も含めたネットワークの重要性を書き込んでどうか。

(西澤座長)

川口町でも復興メモリアル施設の整備を考えているため、周辺地域との調整やリンケージを

考える必要がある。

(小田オブザーバー)

復興リーディング・プロジェクトを実行し完成させるための仕掛けやサポート機構を記述できないか。

(熊谷委員)

本ビジョンは、理念だけでなく、やがて実施計画として具体化されていくことを想定しているものである。本編 14 ページからは山古志で生活していくための骨格が示されており、これは創造的な復興に向けて非常に重要なものであると理解している。しかし、住民の方々から見ると、最低限やるべきことはなにか、どのメニューから手をつければいいのか分からないのではないかと。全メニューを実施するのは困難であるので、メニューのランク付けが必要ではないか。

(木村アドバイザー)

地元の人たちだけで活動を始めるのは難しい。そこで、「株式会社やまこし村(仮称)」であれば、設立会議を開催し、住民と応援団と行政と一緒に活動する場を立ち上げてはどうか。まず場をつくることで、次への足がかりが鮮明になる。

(江村委員長)

今後は本報告に向けて中間報告をどのように肉付けしていくかを検討する必要がある。どのメニューを採択するかは住民が判断することなので、地元の皆さんにヒアリングを行ってはどうか。

(事務局)

現段階でも各年層の代表者にヒアリングを行っている。中間報告後、もう一度ヒアリングを実施したいと考えている。

本編については、本日いただいたご意見を反映させて修正し、速やかに中間報告を行う。

また、今後の組織活動について、どの時期までどのような支援が必要か、ご意見をいただきたい。

(伊藤委員)

- ・「株式会社やまこし村(仮称)」において、村民だけの活動ではなく、県民をはじめとした地域外に住むサポートの意思のある人に対し、広く門戸を開いておいてはどうか。
- ・本編 4 ページ、山古志復興の基本方針の にある、「農を中心とした自給自足型の複合的生活」は、株式会社設立等の外に対して広くビジネスを展開する話と論理的な整合をとっておいて欲しい。
- ・ に「復興にあたっては安全性を最優先する」とあるが、ここに雪による家屋倒壊や雪下ろし時に被害者が出ているなど、まだ地震による被害が続いていることを具体的に書く必要があるのではないかと。
- ・「中越地域安全判定委員会(仮称)」については、住民に向けての安全度の説明だけでなく、行政機関に対しても勧告等ができるような役割を持つことができないか検討して欲しい。

(熊谷委員)

- ・推進組織をつくる必要があるが、その際には、村人だけでなくいろいろな視点を持った人やリーダーシップをとれる人が必要である。

- ・中間報告は復興の設計図として非常によくできている。不足分は委員のみなさんの意見を入れることでよいのではないか。公表後は住民と関係機関にヒアリングを実施すべきである。
- ・ビジョンの一部についてでもいいので、推進母体のあり方と今後の進め方を提案してはどうか。もちろん住民の発意に基づいて母体がつくられるのが望ましいが、その辺りを住民のみなさんがどのように考えているのかをヒアリングで確認してもらいたい。

(事務局)

復興の推進エンジンの必要性は事務局も認識している。推進母体や具体的な活動内容については、第3回の円卓会議でお示しできればと考えている。

(金子委員)

川口町の商店街復興プラン策定のお手伝いをしているが、住民は「とりあえず元に戻してほしい」という意識が強い。ただし、元に戻すだけでは過疎化などの時代の大きなトレンドに対応できない。産業においては、帰村に合わせて復旧と復興を同時並行で進める必要があるのではないかと。

(上村委員)

- ・まず NPO 法人があって、その中で採算に乗るものがあれば株式会社化していくというスタイルの方がよいのではないかと。
- ・スローツーリズムなどにより、いかにして安定的に人に来ていただくかが重要となる。まず、復興を引っ張っていく組織が必要である。機会があれば復興を支援したいというグループは地域内外にたくさんある。その潜在力は大きく、仕掛けがあって情報が提供されれば、彼らがリーディング組織となりうる。その上で、キーマンとなる人やスタッフが欲しいが、当初は外部の人でもよいのではないかと。もちろんその際には、住民の意見はしっかり聞いてほしい。

(和田座長)

- ・今回の震災ではコミュニティが壊れたと認識している。本編冒頭の「国づくり」を「国土づくり」にしてはどうかという意見があったが、コミュニティの再構築も含んだ、「国土づくり」よりも広い意味を持つ言葉の方が適切ではないかと。
- ・山古志ブランドを維持していく戦略が大切になると同時に、どのように情報を発信していくかが復興のキーワードとなる。そのための運営・戦略会社が必要ではないかと。
- ・山古志の人たちはすぐに次の冬が来ると考えている。とくに基盤整備や安全性の検討は雪が解けたらすぐに行動を起こす必要がある。

(伊藤総合アドバイザー)

- ・これからの課題として、子供たちの心のケアが非常に重要になる。次世代を担う子供たちが今回の震災をどう考えているのか、コミュニティを失った中でどれだけ心に痛手を負っているのかを、中学生を中心にヒアリングしていただきたい。
- ・山古志の復興は、日本の他の中山間地の復興モデルにとどまらず、世界のモデルともなりうる。とくに台湾は地質的にも日本に似ており、山古志から国際的に情報発信ができるのではないかと期待している。
- ・将来的には台湾の都市と姉妹都市協定などを結べればよいのではないかと。

(西澤座長)

- ・ぜひ株式会社をつくっていただきたい。ただ、「やまこし村」がひらがなになっているが、「山古志」はブランド化しているので漢字にした方がよいのではないか。
- ・地域外の人たちをどんどん巻き込んでいくことは大切なことである。「元気な山古志研究会」設立の段階で第2村民の募集を始め、積極的に復興に携わってもらってはどうか。

(原委員)

「元気な山古志研究会」は非常に大事な組織になると考える。ただし、5月の最終報告を出した段階で、すぐにバトンタッチできるよう、現実的には水面下で少し早めに動いておく必要があるのではないか。

(5) .今後のスケジュールについて

今後のスケジュールについて(事務局より資料 6説明)

(文責：事務局山口)